

Title	2024年度大会参加記②：「満洲の記憶」研究会と歴史実践
Sub Title	2024年度 "満洲记忆" 研究会参加記②："満洲记忆" 研究会与历史实践 Summary report of the 2024 Annual Meeting 2：historical practice and the Society for "Memories of Manchuria"
Author	白岩, 伸也(Shiraiwa, Shin'ya)
Publisher	「満洲の記憶」研究会
Publication year	2024
Jtitle	満洲の記憶 No.10 (2024. 12) ,p.214- 216
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32003001-20241200-0214

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2024 年度大会参加記②

「満洲の記憶」研究会と歴史実践

白岩伸也

「満洲の記憶」研究会大会で、佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、2020年）に対するコメントをさせていただいた（当日の全体的な様子は、清水亮の大会参加記①を参照）。報告の題目は、「会報をめぐる歴史実践の開放性と複数性—『戦後日本の満洲記憶』を読んで—」。同書の記述から、会報をめぐる当事者による歴史実践の契機に照明を当て、清水亮・白岩伸也・角田燎編『戦争のかけらを集めて—遠ざかる兵士たちと私たちの歴史実践—』（図書出版みぎわ、2024年）と関連づけながら、その研究可能性について試論的に述べた。

発表タイトルにあげたように、開放性と複数性をキーワードとして、前者については、会報には、これまで問題視されてきた閉鎖性のみならず、ときに境界をこえて人々をつなぐ開放的なネットワーク機能が存在し、それが「戦後日本」を問い直す可能性を示唆すると論点を提示した。後者に関しては、書く以外に、残す、伝える、綴じる、置く、集めるなどの複数の歴史実践が、

会報をめぐって展開し、交差していたのではないかという仮説を立てている。

この2点をあげる前提として、『戦後日本の満洲記憶』は、「歴史」あるいは「歴史実践」も対象としているのではないかと問いかけたが、それに対しては、やはり研究会の名前にある「記憶」が中心であるとの応答をいただいた。ただし、あらためて当日の配布資料を見返すと、菅野智博のレジュメには、「本書（＝『戦後日本の満洲記憶』：引用者注）は、引揚者が会報を通して自分たちの歴史を残そうとしていた姿を分析」とある。かれら／かのじよらの「戦後日本」における営みを、「記憶」のみならず、「歴史」としてもとらえようとする視点・意識が、「満洲の記憶」研究会のどこかにあったようにも思われた。「歴史」と「記憶」が、人文・社会科学で注目されて久しいが、「歴史実践」と「会報研究」というまなざしから眺めたとき、それはどのように見えるのか、私自身の問いとしても引き続き考えていきたい。

また、大会会場近くの中華料理屋で開いてくださった懇親会では、「満洲の記憶」研究会のこれまでの取り組みについて、心底興味深くうかがい、気づいたらあつという間に閉会していた。メンバーが私たちの年齢と同じくらいだった10年ほど前に、同会がスタートしたという点で、その重なりを確認したが、同時に、朝まで飲み明かした話からは、コロナ禍で『戦争のかけらを集めて』を編んだ私たちとの隔たりも感じた。何より違いということで言えば、共同の調査を何度も行い、そこで収集した資料とたがいの経験を共有しているのは、ほぼWeb会議システムで研究や原稿を検討し合った私たちと決定的に異なるだろう。

他にも、学園祭の一橋祭で開催したイベントをめぐる経緯や背景、来場者に配ったアンケートやその事後談、「満洲」の「洲」の字を出すの関係者から好印象を得られること、中国での調査をめぐる現地ならではのエピソードなど、どれも本当におもしろく、たくさん学ばせていただいた。ちなみに、満洲をめぐる固有名詞の読み方を間違えないようにと思い、報告前に何度も音読練習したが、私が作成・配布した資料には誤字があり、肝心のタイトルも『戦後日本の満洲記憶』と書いていた。

うかがった話を整理するために、ホテルに戻ってから「満洲の記憶」研究会のブログを拝見したが、一夜で読むことは到底できないほどの記事数だった。ニューズレターも読ませていただいたが、毎号掲載される活動記録は、質・量ともに圧巻で、研究調査を現在まで堅実に積み重ねていることがわかる。

「満洲の記憶」研究会は、すでに歴史実践を当たり前のように行っていたし、その蓄積がもはや歴史になっているようにもみえた。そのなかでとくに私が惹きつけられたのは、当事者の方々と真摯にコミュニケーションを図りながら、そこで生まれる感謝や責任の念とともに、一つひとつの資料やデータを丁寧に拾い集め、人々の記憶を手繰り寄せていこうとする姿である。それは、結果的に生産された、いわばプロダクトとしての歴史というより、それをめぐるプロセスとしての歴史実践といえるのではないか。そのような営みに対して、手触りがありながらも、掴もうとするととらえられないような、生のありようを私は感じたのである。

いま振り返ると、いささかピント外れのコメントをしてしまったと恥ずかしさでいっぱいになるが、そのような反省の機会とさまざまな示唆を今回得られたことは間違いない。登壇者の皆様、大会の運営や準備、参加をしてくださった方々に、心よりお礼申し上げます。